

# 古都紀行～奈良、京都、江戸東京、そしてウィーン

木俣美樹男

東京学芸大学環境教育実践施設

Memories of ancient cities, Nara, Kyoto, Edo-Tokyo and Vienna  
Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

偶然にも、2008年は雑穀研究会も日本エコミュージアム研究会も奈良で開催された。一方、日本有機農業研究会の依頼で有機農業と伝統野菜（在来品種）を3年計画で調査することになった。まずは京野菜から始めようと考えて京都を訪問した。2つの古都はどこを掘り返しても遺跡が出るような土地柄である。日本の現在の首都は東京である。副都心の雑踏は人々だけが多くて、すぐに疲れるので嫌いである。しかし、今年から始めた大学院科目「環境教育フィールド研究」で身近なインドを探して1歩裏道にそれるとあちこちに江戸があった。ついに、

ヨーロッパの古都ウィーンにまで羽を伸ばした。みやこの歴史の奥深さを知らされた、良い旅であった。

## 1. 京の都

京野菜の調査の際に、訪問先との時間調整の合間に訪ねた4つの場所に興味を持った。錦市場には千年の都で必要とされたものが、何でもあるのかも知れないと思った。アワ、キビ、モロコシなどの雑穀はもとより、雑豆や各種雑貨まで、雑踏の中には雑と名づくものが堂々と自分の場所をもっていた。



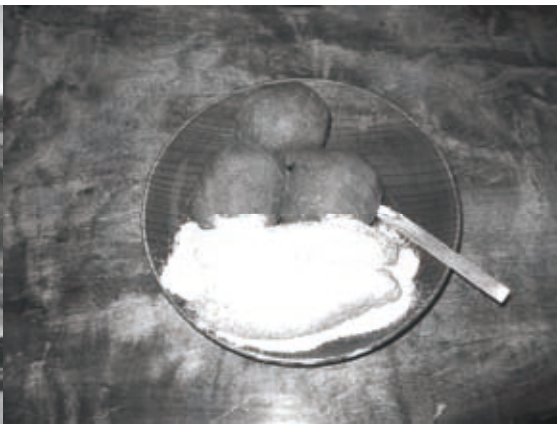
平安神宮の門前の栗餅屋の商いは餡子と黄な粉の2種類のアワ餅だけであった。素のままの味にひかれ続ける人々が少なくないのであろう。本当に、日本人はもち好きである。社殿の装飾を眺めてみると、粟と雀、稗と思しき植物もある。南瓜や慈姑と鴨など、彫り物に彩色してあり、なぜか懐かしい感情になる。

京都府立植物園では、小学校から高校までの児童生徒が腊葉標本を製作してレポートを提出して、そのコンクールが行われ、優秀な作品が展示されていた。大学で腊葉標本づくりの実習をしているが、これほどまでに丁寧な標本を

作る大学生はほとんどいなかった気がする。さすがに京都で、東京の植物園では研究員や学芸員もいないせいか、若い人々が訪れることも少なく、ましてや植物分類学に関心を示す若者など皆無に近い。イギリスのキュー植物園と比べて、情けないかぎりである。日本人は植物が好きなのではなさそうである。

もう一ヶ所は、関西学院大学と京都御苑の間の道にある「ほんやら洞」である。国分寺のほんやら洞の本店であるという。写真家である主人の作品にあふれた店内の、この小汚さは居心地が良い。国分寺のラヂオキッチンもほんやら

洞から暖簾わけしたのか、ヒヨコマメのカレーは京都でも同じような味がした。



## 2. 奈良の都

奈良には雑穀研究会シンポジウムに参加するために大塔村を、日本エコミュージアム研究会全国大会に参加するために明日香村を訪ねた。大塔村は3回目の訪問であるが、最初に訪れたのは、まだ、雑穀研究を始めて間もない頃で、阪本先生や小林さん、京都大学農学部附属植物生殖質研究施設の院生の竹井さんほかの皆さんと一緒にであった。雑穀研究会としては再訪ということになる。福井なつえさんは当時、シコクビエ始めいろいろな雑穀の在来品種を栽培しておられた。日本に伝播したすべての雑穀、アワ、キビ、ヒエ、モロコシ、ハトムギ、シコクビエがこの地域では栽培されていた。竹井さんを通じて福井なつえさんの娘さんが、小

林さんらが分譲を受けたシコクビエの種子を所望されていると聞き、お返しした。すなわち、30年後にシコクビエの里帰りを図ったのであるが、見事に発芽して、育っていた。シコクビエそのものは、まだ大塔村の福井さんの隣家で栽培されていた。福井なつえさんの旧家は道から登りであったので、訪ねてみた。すでに家主は幽界に居を移されて久しいので、今ではスズメバチが巣を作っており、ゆっくり素晴らしい眺望を味わうには危険な状態であった。小林さんの研究されたオロカビエも畑といわず路傍といわず旺盛に繁茂していて、懐かしかった。著者がこの世で一番美味しいと思い、小林さんにねだっていた、粉っぽい食感のサトイモは八頭であることが再確認できた。



小学校の修学旅行で奈良の大仏様を拝観しに行った様な記憶はあるが、明日香村は初めてだと思う。NHKの朝の連続ドラマ「あすか」は著者の祖父が名古屋の和菓子屋「ぶんぶく洞」店主であったので、好もしく視聴していた。しかし、明日香村の景観には美しさよりも、むしろ画一性による冷たさを感じた。小山から見渡せる小都市であったのであろう。日本エコミュ

ージアム研究会全国大会の余興で見せていただいた「大化の改新」名場面は、権力争いによる陰謀、大化の改新が暗殺から始まる不幸、これがどのように仏教との関わるのか、聖徳太子の理想とは何だったのか、いくつもの疑問がわいてきた。

奈良の柿は在来品種から大実の品種まで多彩であり、素晴らしい。



自然に生かされて農山村は成り立ち、農山村に育まれて都市は活きている。山村の過疎集落は消滅するのか。農村は立ち行くのだろうか、都市は元気でいられるのだろうか。

### 3. 江戸の都

東京に流れてきて、30余年経ち、映画「ふう



てんの寅さん」シリーズもかなり見たが、インド伝来の神々にお会いしたくて、葛飾区柴又には初めて行った。したたかに下町の風情であった。続いて神楽坂の七福神めぐりをした。電車の車窓からしか見なかった界隈の賑わいも社寺の境内では静まっていた。こんな街中にも湧水は出るようだ。

### 4. ヨーロッパの都ウィーン

ウィーンはオーストリアの都であり、ヨーロッパの都でもあった。素晴らしい王宮、美術館、博物館、見て回れないほどである。こうした都でも、キビやソバはマルクトでも、スーパーで

も売っていた。展示されていた出土品にもキビなどの穀物があった。類似と差異がある広い世界は面白い。金の雑穀キビはパン、プディング、ビスケット、バターで煎るなどして食べるそうである。

